

【海外留学レポート】

メデジンに魅せられて

-語学だけではない留学-

Attracted to Medellín:

Studying Abroad for more than Studying Language

東京外国語大学国際社会学部ラテンアメリカ地域スペイン語専攻 佐井 暢穂

SAI Nobuho

(School of International and Area Studies, Tokyo University of Foreign Studies)

キーワード：La-CEP、文理協働、インターンシップ、食品ロス、コロンビア留学、世界展開力強化事業

はじめに

2017年7月から2018年5月までコロンビアのメデジンにあるエアフィット大学に留学した。「日本と中南米が取り組む地球的課題を解決する文理協働型人材養成プログラム(La-CEP)」を利用して頂き他大学生との事前学習、現地でのフィールドワークやインターンシップ、そしてプログラム終了後の留学発表会を経験した。自らの研究や進路について真剣に取り組み計画を進めることができ、最高に充実した留学となったと自負しているので私の留學生活の一部を切り取って紹介する。

留學の経緯

なぜ大学での留學先としてコロンビア第二の都市メデジンを選んだのか、まず全てのきっかけから述べていこう。

私はメデジンのことは大学の協定校がある、という事実を認識するまでは知らなかった。ラテンアメリカのスペイン語圏内で私の大学が協定校を持つのはメキシコ、アルゼンチン、そしてコロンビアであり、この三つの中から私が一国を選び取る際に持っていた軸は三つある。まず一つ目は日本人にとってなじみのない国・都市であること。次に気候が温暖であること。第三に都市規模が大きすぎないこと。そうして選んだコロンビア・メデジンはこの三つをしっかりと満たしていた。

一つ目に関しては外務省による平成30年度の海外在留邦人数調査統計を見ても明らかで、メキシコとアルゼンチンにおける在留邦人総数は両国ともおよそ1万1000人を超えるのに対し、コロン

ビアは1300人を下る。海外留学をするなら日本人が少ない国を圧倒的におすすめする。なぜなら、慣れ親しんだ日本語を利用せずに自分の現地語力と対応力のみを頼りにすることになるので、経験値を積むには最も適した環境であるからだ。現に私は大学内でコロンビア発祥のダンスエクササイズ ZUMBA のクラスに毎週参加して友人を作ったり、卒業研究の為にメデジンのフードバンクやコンポストの企業へインタビューをしたり、コロンビア人のみの企業でインターンを行うなどした。これはスペイン語のみ通じる環境を積極的に選び取っていたからこそ成しえたことだと思っている。

第二の「温暖な気候」。メデジンは「永遠の春」と言われるほど年中通して気温が20度強である。四季はなく雨季と乾季があり、雨が降る時期は肌寒いこともあるが厚手のジャケットは必要ない。ただ同都市内でも標高によって気温が大幅に変わる為、街の夜景を観る為に山に行く時などは厚着をする必要がある。個人的にはこの気候がとても合っていた。他の地域と比較すると例えばコロンビアの首都であるボゴタは年平均気温が15度以下とかなり寒く、第三の都市であるカリは年平均24度で湿度が高いので、過ごしやすさで言えばメデジンが優位なのではないだろうか。

第三の都市規模に関しては、毎日の移動や大学へのアクセスの観点、そして自分の住む街にできるだけ詳しくなりたい、という思いから首都ではない都市を望んでいた。メデジンは都市規模で言えば日本の山形市とほぼ同じ面積で移動しやすい。ただ、訪れて初めて知ったのだが、交通渋滞が深刻で通勤・通学ラッシュの時間帯は空いていればおよそ10分強の距離が1時間程度かかることがあるので住むなら大学やオフィスの近くが賢明である。

ビザと身分証明書の取得：

コロンビアの学生ビザを取得するのは困難ではない。留学先の大学の証明書さえ余裕を持って入手すれば、大使館に申請して一か月もせずに発行される。現地に到着してからは全コロンビア人が持つ日本のマイナンバーのような Cédula(セドゥラ)を申請する。3か月以上の滞在ビザを持つ者は全員申請しなくてはならない身分証明書である。まず移民局のHPにてパスポート等の情報を登録し移民局に行く日の予約をする。血液型の証明も必要で事前に調べておく必要があるのを忘れずに。私は大学付近の病院で採血してもらい、後日メールにて結果を貰った。そして移民局に行く日を予約し、当日は必要書類を揃えて向かう。ここで数時間待つことになるので暇つぶしの本は必須である。書類を提出し手数料として日本円でおおよそ7000円を支払い、顔写真と指紋をとり終了だ。1週間から10日後に、HPにて証明書の発行の有無を確認できるので再度移民局に出向き受け取る。

参照：

外務省 HP <https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000368753.pdf>

サンタ・プロジェクト

サンタ・プロジェクトとは日本に興味のあるコロンビア人が集う日本クラブによる年に1回の演劇活動である。日本クラブとはエアフィット大学にて日本語を教える羽田野香里先生が率いる活動で、主に日本文化を楽しみながら学ぶ活動を行っている。夏頃から毎週末練習を重ね、12月に避難民の子どもたちやメデジン市民向けにクリスマスプレゼントとして、メデジン市内にあるベレン公園図書館で上演する。(実はこの図書館は東京大学との協働で建設された。日本庭園のような落ち着きがあり市民の憩いの場所となっている。)プロジェクトの10周年となる2017年の作品に私はスペイン語のナレーターとして出演した。タイトルは「Operación Navidad(クリスマス大作戦)」。サンタクロースを助ける為に妖怪チームと不良チームが競い合い、最後には協力して子どもたちにクリスマスプレゼントを届けるというストーリーだ。

この劇は日本語とスペイン語で行われておりその上演形態は非常にユニークである。例えば「¿Qué? 何だって?」「¡Buenos días!おはよう!」という様に登場人物がまとめて2カ国語を話すので台詞を覚えるのが非常に大変なのだ。そんな困難さでも日本語と日本文化を愛するメンバーの熱量と努力でしっかり乗り越えてしまうのが驚くべきところ。日本で人気のアニメソングやコロンビアの伝統的クリスマスソングを歌って踊りながら進行し、子から大人まで楽しめる劇となっている。当日は劇前に行われる日本語レクチャーや劇中にあるギャグ等にしっかり反応してくれる子どもたちのキラキラした表情に私たち演者の方が幸せを貰ってしまった。このプロジェクトは毎年続いており、長期でメデジンを訪れる方はぜひ参加してみたい。

インターンシップ

私は今回 Cámara Colombo Japonesa (コロンビア日本商工会議所) でインターンシップを経験した。日本とコロンビアの企業がそれぞれの国に進出する場合のサポートや日本文化イベントを実施する団体である。私は日本のビジネスマナーを紹介するプレゼンテーションとビデオ作成を行い、日本進出を望むコロンビア企業が知っておくべき慣習について盛り込んだ。日本独特の名刺交換や取引先の呼称、飲み会文化などコロンビア人にとっては未知の情報を提供できたと思う。実際にコロンビア人同士の商談に参加する機会があったのだが、私が紹介した日本のビジネス風土とは差異を感じ興味深かった。名刺交換の重要度は日本ほど高くなく、商談者同士は下の名前で呼び合う。さらに仕事の付き合いでの飲み会はなく、飲食を含む会合であればランチミーティングの方が主流であるように感じた。

人生初めてのインターンシップの経験であったが、仕事のツールとしてスペイン語を使うことの難しさや要求される仕事に自分の実力を持ってどこまで応えられるか、を試された良い機会であった。

メデジンの音楽文化

ラテン文化の中で私が最も魅了されているのは音楽とダンスである。サルサ、バチャータ、メレンゲ、キソンバ、バジェナート、チャンペタ、クンビア、レゲトン…中南米発祥のダンスは総じてコロンビアでも一般的に聴かれ踊られている。踊る、というと日本では伝統舞踊や習い事の一環であるなど練習を重ねた成果を人前で披露する、といったイメージが強いかと思う。コロンビアにも伝統的な舞踊は存在するものの、それ以上にディスコ・クラブ文化が強く根付いているのと、さらに家族や友人同士で集まる時も音楽をかけて皆で踊るのが一般的である。

メデジンにはサルサ・バチャータを流すクラブが多くある。外国人が多く訪れる地域などはダンス教室・フリータイムを設けており、ダンスを学ぶことを目的とした外国人や英語を練習したいコロンビア人など老若男女が集うコミュニティが存在する。基本的にペアダンスであるので踊る時は相手を見つけねばならない。私はこのシステムのお陰で、友人の誕生日パーティーや家族の集まり、ダンスクラブの実践で踊り方を学びつつ現地人とのコミュニティを広げていった。

そして、「レゲトン」。この音楽ジャンルに触れずにメデジンの流行は語るができない。レゲトンは中南米の若者の間で流行している音楽であり、ある決まったドラムのリズムが刻まれつい癖になってしまう。リズムが一定だからこそ各々の歌手の歌い方やラップの口調などに個性が出るのでそれらを聴き比べるのも楽しい。世界中で大流行したプエルトリコ出身の歌手、ルイス・フォンシの「デスパシート」もこのジャンルである。若者が集まるダンスクラブはオールドスクール（懐メロ）から最新曲までほぼ全てレゲトンで夜が明け、街中を歩いている店内にいても大学でもどこでも聞こえてくるのはレゲトン、レゲトン、レゲトン…。サルサやバチャータとは違い基本の踊り方などは一切ないので誰でも音楽に身をまかせれば自然と踊れるのが良いところ。

メデジン、コロンビアに限らずラテンアメリカにおいてダンスは文化の一部でコミュニケーションの一環として欠かせない存在である。日本ではなじみがないが、だからこそ少しでも知っていると大変驚かれ喜ばれるので、中南米を訪れる方は予習しておくとも良いだろう。そして自分は未経験だから、と遠慮するのではなく挑戦してみると案外できるものである。メデジンにおいては無料のダンス教室がショッピングモールや公園で頻繁に行われており参加のハードルも低い。現地人と踊ってみてダンスカも友好の場も広げてほしい。

研究

私は、留学当時食品ロスとフードバンクの活動について興味を持ちメデジンにおける食品ロス活用の取り組みについて調査を行った。フードバンクとは「食料銀行」を意味する社会福祉活動でまだ食べられるのに、様々な理由で捨てられてしまう食品を救済し、それを必要とする人や施設に届ける活動のことである。日本においてはセカンドハーベストジャパンが最も大規模に活動を行っている。

一つはメデジンにおいて活動する SACIAR というフードバンクでインタビューを行なった。SACIAR とはスペイン語で「(飢え、渴きを) 癒す。満足させる。」という意味である。この組織はメデジン郊外の農民や国内紛争による避難民、貧困層や先住民に食料や日用品を分配している。食料の供給源は大手のスーパーマーケットや一般人の寄付から成り立つ。基本的に世界のフードバンクの活動はどれも類似しているのだが国の食品寄付に関する法律や再分配の対象者は国ごとに異なり、例えば日本とコロンビアにおける社会的弱者の生活を、フードバンクを通して比較することができる。さらにヨーロッパが率先して進め、日本も本年成立が決まった食品ロス削減に向けた法案により、フードバンク活動にどこまで拡がりが出るのか、についての検討も可能である。

次に食品コンポスト(たい肥化処理)の処理槽を作る企業 EARTH Green COLOMBIA へのインタビューを行った。コンポストとは有機物を微生物の力で分解したい肥化することだが、本企業はプラスチックなどの無機物も分解できる技術を持ち画期的であった。会社がある周辺の地域住民の家庭からごみを無料で回収し出来たい肥の販売もしている。この処理槽は私が在学したエアフィット大学にも設置されており、学食から出た残飯の一部をたい肥化して大学内で農業を行う学生が利用するなど循環システムが出来上がっていた。食料は食料として消費することが一番ではあるものの、異なる形にして再利用を行うことも食品ロスへの対策の一つとして可能性を感じた。

これらのフィールドワークを通じて、現場で働く人の思いやボランティア精神、環境改善にかける思いなどを知ることができた。一つの活動内容においても様々な目的が存在することを実感し、個の事象に関しても複数の要素を洗い出すことでより詳細に理解できる、と感じた。この経験は今後の卒論の進行だけでなく自らのキャリアを考える際に活かしたい。

留学後発表会

留学後に La-CEP の参加者が集まり、それぞれ留学中の研究活動やインターンシップについて報告した。東京農工大学と電気通信大学の学生たちの理系研究の話は新鮮で、東京外国語大学の仲間の報告は同じラテンアメリカ地域に留学したと言えど、それぞれの興味範囲は驚くほどに多様であった。貧困や孤児問題という普遍的な社会課題に対しても国によってその構造は異なり、さらに解決の為のアプローチ方法は無限に存在することを実感した。それぞれの学生がその中で最も興味を惹かれた活動を行い、知見を深め、今後の人生の方針に関わる経験を得ることができただろう。

おわりに

今回の留学では、言語を学ぶのではなく、自らの興味や研究の幅を広げる為にスペイン語を活用することができた。その成果として、留学終了後に、読・書・聴・話の四技能が試される DELE スペイン語検定の C1 (上級) を取得することができた。今後も最上級の取得を目指して引き続き勉強をしてい



コンポストの処理槽



インターンシップで企業イベントに参加した際の一枚